

荒木田麗女と頼春水の交流

——麗女『初午の日記』春水序文について——

時 田 紗 緒 里

〔要旨〕 荒木田麗女は、伊勢神宮神職の妻で、和歌、連歌、擬古物語、歴史物語、紀行文、漢詩等、多岐にわたる作品を残した近世中期を代表する女性文学者である。

安永六年（一七七七）成立の『初午の日記』は、同年に家雅と共に決行した旅をまとめた紀行文で、これに朱子学者の頼春水の序文が付されている。『初午の日記』に関する先行研究では、春水の序文については注目されず、検討されてこなかった。

そこで、本稿は『初午の日記』春水序文から、『初午の日記』序文執筆の経緯と麗女と春水の交流の諸相を明らかにする。

『初午の日記』春水序文には、安永七年（一七七八）に春水が自らの父を伴って吉野に花見へ行く計画があり、これを知った麗女の夫家雅が、帰りに伊勢に寄るよう勧めた、という記載がある。これについては、春水『在津紀事』にも同じ出来事と思しき記事が存在する。両者を照らし合わせることで、春水の『初午の日記』序文執筆は、安永七年の吉野花見後から年内までに書かれたものと特定できるのである。

麗女が春水に序文を依頼した時期は判然としないが、春水は『初午の日記』序文で麗女について「才人なり。文辞気岸ありて、詩歌誦すべし。蓋し閨秀の秀なり」と述べ、文才を評価している。さらに、「永く以って好みを為さん」と結んでおり、以後交流を持つ意志が見える。麗女の春水への序文依頼は、両者の交流のきっかけとなったと言えるのではないか。

なお、春水と麗女・家雅とは、現在確認出来る限り、序文以降の交流が見られる資料は存在しない。春水は天明元年（一七八一年）に大阪を離れていくため、交流が続かなかったものと思われる。

〔キーワード〕 荒木田麗女・頼春水・慶徳家雅・『初午の日記』・『在津紀事』

一、はじめに

荒木田麗女（享保十七年～文化三年（一七三二～一八〇六））は、はじめ名を隆といい、後に麗と改めた。字は子奇。号は紫山、清渚。伊勢神宮内宮権禰宜の娘として生まれ、十三歳の時、伊勢神宮外宮御師である叔父の荒木田武遇の養女となった。麗女が二十二歳の時、武遇に子がいなかったために、慶徳家雅を婿養子として荒木田家を継がせた。

麗女は連歌を西山昌林に学び、後花の下昌廸にも師事。連歌の第一人者として豊宮崎文庫月次連歌会の指導を担った。また、著作活動も旺盛である。作品は多岐に渡り、二種十七巻の歴史物語と、五種十七巻の日

記、紀行、随想の他に四十七種二百十六巻の作り物語を執筆した。さらに、生涯を通して和歌、連歌、俳句、漢詩等膨大な作品を残している。

安永六年（一七七七）成立の『初午の日記』は、同年に家雅と共に決行した旅をまとめた紀行文で、これには朱子学者である頼春水の序文が付されている。

『初午の日記』に関する先行研究としては、雲岡梓氏「紀行文『初午の日記』と『後午の日記』について」（『荒木田麗女の研究』所収、第四部第一章。初出は『人文論究』第六十四巻第一号、二〇一四年四月、原題「荒木田麗女の紀行文―『初午の日記』・『後午の日記』の道程―」）が備わり、日記に見える麗女が面会した人物として春水の名を挙げるのみで、他に本書を扱った論文は存在しない。特に春水の序文については注目されてこなかった。しかしながら、『初午の日記』序文の検討は、麗女研究、春水研究双方にとって意義があり、また当時の文人の交流の様子を知る上でも重要な資料であると考ええる。

そこで、本稿では春水の序文を検討し、『初午の日記』序文執筆を巡る経緯を整理すると共に、麗女と春水の交流の諸相を明らかにする。

二、頼春水について

頼春水の伝記について、頼山陽編「先府君春水先生行状」^{〔1〕}より概観する。

頼春水（延享三年～文化十三年（一七四六～一八一六）、名は惟寛、字は千秋、通称は弥太郎で、春水は号である。頼惟清の長子として安藝に生まれ、はじめは平賀中南に学んだ。

明和元年（一七六四）、春水は病のため医者に診てもらうことを目的

として、大坂を訪れている。この頃について、多治比郁夫氏は「混沌社の成立と頼春水」^{〔2〕}において、

明和元年三月から八月にかけて、十九歳の頼春水が短期の上方旅行をした。病氣治療という目的があったらしいが、あらかじめ調査し作成していた上方文人の姓名住所録を携えていたことから考えると、名家訪問も目的の一つであったと思われる。

と述べている。その後、明和三年（一七六六）に大坂へ移住し、片山北海に師事した。北海を盟主とした混沌詩社の創立は、春水来坂の翌年であり、春水はこれに加わった。活躍はめざましく、「詩豪」と呼ばれ高く評価された。

江村北海は『日本詩史』^{〔3〕}において、春水について「近時竹原邑に頼惟寛有り。才子の称有り。今浪華に住む」と述べており、「才子」、すなわち際立って才能のある人として評価している。

天明元年（一七八一）、広島藩儒に登用され、江戸勤番を並行して務めた。朱子学を以って藩の学制を一新し、江戸においては松平定信に献策するなど後の寛政異学の禁にも影響を与えている。晩年は安藝で過ごした。享年七十一。妻の静子（頼梅麿）は和歌に秀でた文人であり、長子は頼山陽である。弟に、惟強（字は千齡、号は春風）と惟柔（字は千祺、号は杏坪）がいる。

三、麗女『初午の日記』について

『初午の日記』は、安永六年成立。同年二月九日～四月十八日まで、

六十八日間の旅を書いた紀行文である。旅は、伊賀、和泉、近江、河内、紀伊、摂津、播磨、山城、大和を巡る。この旅の時、麗女は四十六歳、家雅は五十四歳である。

春水の序文、麗女自身の序文、本文で構成されており、旅の経緯について、以下『初午の日記』麗女の序文を引用する。⁴⁾

安永六はしらにあたる春、都の方におもひ立待りぬる事は、年比のねがひにて、去年の冬よりうちうち心にかけつる事なれど、歌枕などことごとくにとりなされん、世の聞こえをはかりて、人には露しられじと、いみじう忍びつゝ、旅の調度何くれの用意も、こまかにはものせず、たゞ夫なる人の、浪華の方におもむき給へる、いそぎのやうに聞こえなす物から、よろづおろそかに皆とゞめて、常に目ぢかう身にそふばかり思へる書どもさへ具せず、いといったうやつして、二月九日できたる（傍線筆者）

この序文は、「今回の旅は前年冬からの前もつての計画であったが、世間を憚って夫の仕事で急ぎの用だというふりをして、ごく簡素な支度で二月九日に出立した」と解釈できる。雲岡氏は、前掲論文において、

長年上方旅行を望んでいた麗女は、夫に難波に赴く用事ができたため、それに合わせて旅を決定した。家雅は伊勢神宮外宮御師なので、この時の用件は御師の職務の檀家回りではなかったかと推測される

と述べているが、前述の通り、概当部からは家雅の仕事を目的とした旅であるとは読み取れない。故に、本序文に基づく雲岡氏の見解は疑問で、

「たゞ夫なる人の、浪華の方におもむき給へる、いそぎのやうに聞こえなす物から」の部分を読誤したのかと思われる。

四、麗女と春水の交流

『初午の日記』には、三月五日、難波滞在時に麗女と春水が邂逅した記載がある。「五日、空も晴れぬれば、千秋先生の方にまうでて」と、ただ春水を訪問したという事実のみ述べられている。

『慶徳麗女遺稿』にも安永六年の旅についての記事があり、春水について言及がある。

安永六年遊行して彦根にいたり、龍世華、海老江氏、野公台を訪ひて、それより京にのぼる。（略）京より浪華に下りて、細谷^マ、頼、橋本、岡、兼葭堂、画師の森蘭齋など訪ひて、夫より須磨明石みむとて播磨にいたり、法華寺に詣で、三草に行きたり。（略）又難波に出で、そこより芳野の花をたづね、紀路にゆきて、粉河、若の浦にいたり、（略）此遊行の程の事は、初午の記あり。頼千秋の序あり。⁵⁾

大坂にて交流を持った文人の中に春水の名が見え、『初午の日記』に春水の序文が付されていることが書かれる。

麗女の視点から春水との交流を記載した資料はこの二点のみである。

『初午の日記』、『慶徳麗女遺稿』共に春水との交流についての詳細は判然としないが、麗女にとって春水と面会したという事実は記録するに値する出来事だったことがうかがえるのである。

五、『初午の日記』春水序文

春水の視点から麗女との交流について知ることができるのは、『初午の日記』の春水序文⁶のみである。本序文から、序文の執筆経緯と麗女の評価について考えて見たい。

なお、麗女が春水に序文を依頼した時期については、安永六年の旅以降、本序文成立以前と思われるが、特定には至らなかった。では、春水序文を見ていく。

去歲丁酉、勢之慶徳君、携室君遊于五畿。室君、荒木田氏才人也。

文辞有気岸、詩歌可誦。蓋閨秀之秀也。偕訪余春水之精舎。相見再四而別、路歷芳野而帰紀行曰初午日記。

（去歳の丁酉、勢の慶徳君、室君を携へ五畿に遊ぶ。室君は、荒木田氏の才人なり。文辞気岸ありて、詩歌誦すべし。蓋し閨秀の秀なり。偕に余が春水の精舎を訪ふ。相ひ見ることに再四にして別れ、芳野を路歴して帰る行を紀して初午日記と曰ふ。）

まず、冒頭に「去歳の丁酉」とあり、「丁酉」は安永六年にあたる。

春水は、この序文を書いた時点で麗女の旅を「去歳」と表現している。これが、「前年」の意で使われているか、「過ぎ去った年」の意として使われているのかはここだけでは判断できないのだが、先に述べると前年、すなわち一年前の意味で使われている。これについては後述する。

「勢の慶徳君」とは、伊勢の慶徳家雅を指し、麗女の夫家雅のこと。

家雅は妻を伴って五畿を巡ったとある。この「室君」、つまり麗女につ

いて春水は「才人」とし、「文辞気岸ありて、詩歌誦すべし」とその詩の才を褒める。さらに、「蓋し閨秀の秀」、才能豊かな女性の中でも特に秀でているとしており、女性に限定した評価であることには注意すべきであるものの、その才能を認めていると見てよいだろう。

「偕に余が春水の精舎を訪ふ。相ひ見ることに再四にして別れ」とあるので、春水の家にはこの旅の時に夫婦そろって訪れ、それが数回に渡ったらしい。『初午の日記』には、麗女と春水とが三月五日に面会したこのみ書かれていたが、初対面の後、難波滞在中に交流があったものと思われる。

続いて、序文の執筆経緯が書かれる。

君識家翁今春將自郷里至遊芳野、遠寄示之于余。賛成其挙、且慫慂自芳野到于勢。且謂、吾家屢々邀津城文学奥田文。其人齒八十余。

以故、吾妻能慣老人眠食侍養焉。書字殷勤感喜駢至。

（君は家翁の今春まさに郷里より至り芳野に遊ばんするを識り、遠くこれを余に寄示す。その挙を賛成し、且つ芳野より勢に到れと慫慂す。且つ謂ふ、「吾が家屢々津城の文学奥田文を邀ふ。その人齒ひ八十余なり。故を以て吾が妻能く老人の眠食侍養に慣ふ」と。書字殷勤の感喜駢び至る。）

「君」とは、麗女の夫家雅のこと。「家翁」は、春水の父惟清を指す。

「惟清が今春郷里である広島から来て吉野を旅する」ということを家雅が知り、春水に手紙を送ったという。「今春」とあることから、惟清を伴う春水の吉野への旅が為されたのは、春水がこの序文を書いている時点での同年の春であることが示される。

家雅は、吉野への旅に賛同し、吉野の帰りに伊勢に来るよう勧める。そして、家雅の家は、しばしば津藩儒奥田三角を迎えているが、三角は八十歳を過ぎていたため、麗女は老人の寝食の世話には慣れていると述べる。これに対して、春水は「書字殷勤の感喜駢び至る」として、大いに喜びを表している。家雅が伊勢に寄るよう手紙を春水に送った事と、惟清にも配慮する内容に春水は感動したのであろう。

吉野の旅については、

三月望後、家翁携弟果至。於是朋友塾生相結為芳野之遊。到則所謂不開余、不謝起。巧占花信、扑躍如狂。

〔三月望後、家翁弟を携へ果して至る。是に於て朋友塾生相ひ結びて、芳野の遊びを為す。到れば則ち所謂開きて余さず、謝して起さず。巧みに花信を占め、扑躍すること狂ふが如し。〕

と語られている。「三月望後」とあるので三月十五日以降、惟清が春水の弟春風を伴って、春水の元にやってきた。春水の友や塾生なども同行して、吉野の花を見に行った所、花は全て開いて散り始めてもいない状態で、非常に丁度良い時期だったために、「扑躍すること狂ふが如し」、手をたたいて踊るかのように大いに喜び、狂わんばかりであったということである。

吉野の旅の後は、結局一行は伊勢へ行っていない。

激賞連日、始婦乃説家翁以其来意、家翁大喜謂、深戴其愛、吾父子之厚意。吾豈不感激乎。吾今七十余、遠遊于百里外。是花為耄也。転適于勢、已甚。汝寛善謝之。

〔激賞すること連日、帰へるを始めて、乃ち家翁にその来意を以て説くに、家翁大いに喜び謂はく、「深くその吾が父子に厚意ある愛を戴く。吾れ豈に感激せざらんや。吾れ今七十余、遠く百里の外に遊ぶ。是れ花の為に耄するなり。転じて勢に適ふは、已に甚し。汝寛善くこれを謝せよ。〕

花を賞美して帰る段となつて、春水は始めて惟清に家雅からの手紙の趣旨を告げた。惟清は大変喜び、感激した旨を述べるのだが、伊勢に向かうことは辞する。安藝から吉野は遠く、吉野からさらに足を伸ばすことは、七十を越える惟清には負担が大きかったことは想像に難くなく、断るのも無理からぬことであろう。そして春水に、よく家雅に謝るよう申し渡したとする。

最後に、春水は『初午の日記』と麗女について、

況今読其書、猶携手於芳林淡月之下。因題其言、併余遊草、以還之。報匪。永以為好也。

〔況んやその書を読む、猶ほ手を芳林淡月の下に携ふがごとし。因てその言を題して、余が遊草を併せ、以てこれを還す。報ずるに匪ずや。永く以て好みを為さん。〕

と書く。『初午の日記』について、「猶ほ手を芳林淡月の下に携ふがごとし」と表現しており、さながら豊かな竹林で朧月の下で手を取り合うかのような心持ちであったということ、つまり今回の吉野の旅では会うことができなかったものの、著作を読むことで麗女を知り、通じ合っ

たのだと述べていると思われる。

そして、惟清の言と、春水の思うところを書いて併せて序文として家雅に送ったとして、「報ずるに匪ずや。永く以つて好みを為さん」と結んでいる。恩に報いるのではないとするこの「恩」とは、惟清と春水に伊勢へ来るようにと誘ったことを指すと考えられ、その好意がなくとも序文は書くつもりであったという春水の意図を示すものと解釈できよう。最後の「永く以つて好みを為さん」とは、序文を寄せることを契機として、今回限りではなく、文学的な交流が続くことを望む春水の意が示されているのである。

以上、序文には、麗女に対してと『初午の日記』について賛辞を送り、家雅との手紙のやり取りによる序文依頼の経緯と、それに関わる春水の吉野の旅のことが書かれていた。序文からすると、春水と麗女、家雅とは、『初午の日記』の旅で面会したものの、春水の序文執筆まで、それほど深い付き合いではなかったようである。しかし、春水は麗女の『初午の日記』を読み、本序文をきっかけとして、麗女と文学的な交流を持つ意志があったのだろうと推測される。

六、春水『在津紀事』

『在津紀事』は、春水が二十一歳から十六年間の大坂滞在のことを回想して書き記したものである。春水六十五歳の文化七年（一八一〇）に執筆し、文政十一年（一八二八）刊『春水遺稿』（詩文十一巻、別録三巻）の別録一・二として刊行された。⁷⁾

『在津紀事』には、『初午の日記』春水序文で言及された吉野の旅についての記事があるため、『初午の日記』春水序文と比較し、検討したい。⁸⁾

戊戌の歳、復た家君を催して曰ふ。「芳野の遊、豈に意無からんや」と。千齡郷に在り、従臾して賛成し、復た奉じて来る。三月十又九日と為す。嘗て芳野の花期失し易きを慮り、周く爰に諮詢し、供を結び装を理むることも亦た已に粗定まる。越に廿又一日大坂を発す。

「戊戌の歳」は、安永七年（一七七八）を指す。従って、『初午の日記』で「今春」と表現されていた吉野の旅が、安永七年のことであったと判明する。先述の春水序文冒頭の「去歳」とは前年、すなわち一年前の意味で使われており、本序文が安永七年三月末以降同年内に執筆されたものであると推定できよう。

「千齡」は春風のこと、「家君」は惟清のことであるので、「三月十又九日」に春水の弟が惟清を伴って春水の元へ来たということになる。『初午の日記』春水序文の「三月望後、家翁弟を携へ果して至る。」とあった部分と一致し、その後二日後の三月二十一日に大坂を出発したのだと分かる。

旅の様子については、『初午の日記』春水序文よりも『在津紀事』のほうがやや詳しい。

同行の者、江田楨夫を首と為し、余の兄弟及び小山仲鵬、翔、作兵衛と称す・雨森太卿政太郎と称す・安田駿伸、迪、金平と称す・宇都宮清蔵の輩二十余人。当麻に宿す。翌芳野に傳る。則ち花開くと十分なり。余天幸を獲るを以て、歓抃自ら勝へず。その翌諸勝を歴観す。千齡に記有り。是れ江戸堀に在る時の事なり。

『初午の日記』春水序文では「朋友塾生」とのみあった同行者が書かれ、春風と、江田楨夫、小山仲鵬、雨森太、安田駿伸、宇都宮清蔵の名が挙がる。二十人を超える集団での旅であった。

大坂を立った夜は当麻に宿泊、吉野はその翌日に到着したとの経緯も書かれており、前述の通り、一同は三月二十一日に大坂を出発している。吉野に到着したのは二十二日ということになる。

花を鑑賞した後、「その翌諸勝を歴観す」とあるため、二十三日は未だ帰途になく、大坂への帰着は早くとも二十四日以降と思われる、『初午の日記』の序文執筆はその後と考えるのが妥当であろう。

七、まとめ

『初午の日記』春水序文は、安永七年三月二十一日に大坂を立ち、翌二十二日に吉野に至って後、二十四日以降から同年内に執筆されたものであるということが『在津紀事』との比較で特定できた。

また、安永六年『初午の日記』の旅の後、春水の『初午の日記』序文成立までの間に、家雅と春水とに手紙のやり取りがあったことが判明した。これは、家雅を介してはいるものの、麗女と奥田三角との交流を引き合いに出していることから、家雅と春水一対一の関わりではなく、麗女も含んでの関係と見てよからう。

麗女が春水に序文を依頼した動機は判然としない。『初午の日記』で記される麗女の安永六年の旅で関わった人物から選んだのだろうか、以前からの親しい付き合いがあったわけでもなく、和文の紀行文を読んで評価する人物として適しているかと考えると、春水が朱子学者である点からふさわしいとは言い難いように思われる。

麗女が春水に序文を依頼したのがいつなのか、安永七年の春水の旅の前か後かも不明だが、春水の『初午の日記』序文執筆を巡る言、「報ずるに匪ずや。永く以って好みを為さん」は、麗女の好意の見返りに序文を書いたのではない由を強調しているように解釈できる。故に、安永七年の春水の旅の前にすでに序文執筆依頼が為されており、旅を巡る家雅との手紙の応酬の後に序文を書いたために、「報ずるに匪ずや」と言い添えたとも考えられよう。麗女は、旅の後、序文を春水に依頼し、交流のきっかけとしたのではないか。

なお、春水と麗女、家雅は、現在確認出来る限り、序文以降その後の交流が見られる資料はない。春水は天明元年（一七八一）、広島藩儒に登用されて大阪を離れているため、交流が続かなかったものと思われる。

註

- (1) 竹林貫一『漢学者伝記集成』（關書院、一九二八）参照。なお、本書には頼山陽編『先府君春水先生行状』（『事実文編』所載）により校正した旨の記載がある。
- (2) 多治比郁夫・中野三敏校注『当代江戸百化物語 在津紀事 仮名世説』（新日本古典文学大系九十七）に解説として所収される。
- (3) 江村北海著『日本詩史』は、明和八年（一七七二）に刊行。正編五卷、統編一卷。本発表中の本文引用は、新日本古典文学大系六十五『日本詩史 五山堂詩話』に拠る。
- (4) 『初午の日記』は、国立国会図書館蔵本を底本として、古谷知新氏『江戸時代女流文学全集』（文芸書院、一九一八年）を適宜参照した。旧字体通行字体に改め、適宜句読点・濁点を補った。（『初午の日記』引用は以後同）
- (5) 「ママ」と示した部分、「細谷」は「細合」の誤りと思われる。
- (6) 原漢文。底本に送り仮名、返り点等がある箇所は底本に従い、適宜句読点、濁点、

送り仮名を補って書き下しを付した。なお、傍線は筆者が私に施した。

(7) 注2で示した多治比氏の解説を参照。

(8) 本発表における『在津紀事』本文は、新日本古典文学大系収録の多治比氏による書き下しを引用した。注2参照。なお、底本は、明治十年刊『春水遺稿』の『増補在津紀事附録』に収められた『在津紀事』を使用し、対校は頼惟勤氏蔵稿本で行ったと記されている。

(文学研究科日本文学専攻 博士課程後期三年)

The Interaction Between Arakida Reijo and Rai Shunsui:

Regarding Shunsui's Preface to Reijo's *Hatsu uma no nikki*

TOKITA Saori

[Abstract] Arakida Reijo was the wife of a priest at Ise Shrine. Surviving works by Reijo in waka poetry, renga linked verse, narratives patterned after classical monogatari, historical narratives, travel accounts, kanshi in literary Chinese language, and other works across a wide range of genres, place her in the first rank of women literary figures during the middle of Japan's early modern period (late 16th to mid-19th centuries).

Composed in 1777, *Hatsu uma no nikki* [Diary of the First Horse Day of the Second Month] is an organized account of the journey she took that year with her husband Ietada. A preface by the neo-Confucian scholar Rai Shunsui is preappended. Previous research on the *Hatsu uma no nikki* includes work by Azusa Kumooka, but attention has not so far been paid to the preface by Shunsui, which remains

unexamined.

This paper therefore examines the *Hatsu uma no nikki* preface by Shunsui to clarify the circumstances under which the preface was written together with various aspects of the interaction between Reijo and Shunsui.

The *Hatsu uma no nikki* preface by Shunsui records that Shunsui planned a trip to Yoshino for flower viewing with his father in 1778. Reijo's husband Ietada heard about the trip and urged him to stop by Ise on his return.

Shunsui also mentions what appears to be the same event in his *Zaishin kiji* [Record of a Stay in Settsu]. Comparison of the two suggests that Shunsui wrote his preface to *Hatsu uma no nikki* during the period following his 1778 flower viewing trip to Yoshino and before the end of that year. It is not clear just when Reijo asked Shunsui for a preface, but Shunsui very positively appraised Reijo's literary talent in his *Hatsu uma no nikki* preface: "A person of talent. Her writing shows dignity of spirit, and her poems in Chinese and Japanese are worthy of recitation. No doubt she is among the most accomplished of the accomplished women." He concluded with the additional statement, "I intend to sustain this connection with her," thereby showing that he meant to interact further with her thereafter. It appears likely that in asking Shunsui to write a preface, Reijo succeeded in making it the occasion for their interaction.

So far as is known today, no sources exist that depict any further interaction by Shunsui with Reijo or Ietada following this preface.

Shunsui moved away from Osaka in 1781, and that is likely the reason the interaction did not continue.

[Key Words] Arakida Reijo, Rai Shunsui, Keitoku Ietada, *Hatsu uma no nikkei*, *Zaishin kiji*